

私が行っている実践人類学

科学技術関係応用人類学の最近の動向と事例

慶應義塾大学
平成16年8月 3日

株式会社 鴨
紀井奈 栗守
Christopher R. Keener, Ph.D.
duck@kamoinc.com



1

幼いころの私

- 東海岸コネチカット州生まれ
- 海軍に勤務していた父からの土産物
 - 鯉のぼりと最新のトランジスターラジオ
 - 古きよき時代と高度成長期の日本の両極端なイメージ
- 母の厳しい躾
 - 添加物、炭酸飲料、砂糖、保存料の摂取を制限
 - テレビなし

2

必修科目がない大学は天国

- 慶應の姉妹校であるアイビー・リーグのブラウンに入学
- 基本的に必修科目がない
- 自由な環境が功を奏し、外国語と水泳を学ぶ意欲が出た

3

日本語・社会・文化についての勉強

- 2年生から日本語をはじめ
- 3年生の2学期に文化人類学科のビーマン教授と知り合い、日本の社会と文化について学ぶことになる

4

大学の専攻

- ブラウン大学では2年の2学期修了までに専攻を決める必要がある
- 1年の時は文学の講義を受けていたが、得意だったコンピュータを専攻することに決めた

5

人類学への道

- 大学3年の時に最先端のコンピュータを搭載した研究所ができた
- 3年の夏期休暇中にビーマン教授が率いた研究の教育、文化、社会的の面のチームに参加
- ビーマン教授の勧めで人類学の大学院を申し込み4年で文化人類学の最初のゼミに出席できるようになった

6

大学院の選択と入学

- 当時的人类学では科学技術および先進国での研究を許さなかった
- ビーマン教授に当時のアメリカでは希少だった1人の教授を紹介してもらう
- カリフォルニア大学バークレー校に入学

7

大学院での経験

- 1年は辛かった
 - 人類学の教授の意見が一致しないため、大学院の入学生を各教授が選ぶシステムになった
 - 修士になるためのゼミの1学期は、英国で学んで来た社会人類学者によるもので大変きびしかった
 - 入学できなかった人たちも講義に出席したためプレッシャーを感じた

8

大学院での経験

- 1年の2学期から慣れてきた
 - 2学期は自分の指導教授ともう1名の文化人類学者のもとで学ぶ
 - 目的が理解できた：教授と対等な立場
 - 自信が出る

9

博士論文研究対象地域の選択

- フルブライト奨学生として再び日本へ
- 日本の指導教授：経済学者
- 人口1万6千人で中小企業が400社もある町
- 40人に1人が社長

10

坂城町での研究

- 長期滞在型の研究活動の難しさ（保守的で外から来た者を簡単に受け入れない）
- 降水量が少ない、金属がさびない
- 家内工業（養蚕 製糸 機械化）
- 系列に属さない（独自の技術）

11

コンサルティング会社の設立

- 学問の道を抜け出して会社を設立
- 白人男性が教授になるのは大変
- 大学院時代に教授の補佐として授業を担当した経験から、私にはフィールドワークが足りないと感じていた

12

取引先 会社設立当初

- ブラウン大学の研究からスピンアウトしたソフト会社
- 日本の一流企業の系列会社がアメリカの小さなコンピュータソフト会社と円滑に付き合うことをサポートできる人材を探していた

13

現在の仕事

- 仕事のほとんどが口コミにより成り立っている
- ダラスに本社を持つサプリメント直販売の上場企業をサポート
- 日本法人の立ち上げとコンピュータのシステム化、ベンダーとの打ち合わせ

14

将来の希望

- 人類学者しかできない仕事を請けられるよう人類学者のネットワーク作りへの取り組み外国の企業および研究機関は最初のターゲット
- 最終的に日本の企業に対するサービスを目指す
- 利益を目的とした研究だけではなく、複数の学者と共同研究を行い有名な専門誌に論文を発表したい

15

実践人類学の活躍の場

- 日本と外国の企業の仲人役
- 私が実践してきた例
 - クレジットカード決済
 - テクニカルサポート
 - 契約交渉関連（弁護士の担当外）

16

実践人類学の未来

- 携帯電話や iPOD/PDA のような小型電化製品の市場は日本が世界第 2 位
- 海外企業の市場参入が難しい
- 海外では人類学者の存在を認めている
- 近々日本でも人類学者が必要になる
- 技術者は多くの機能を創造できるが、ヒット商品になるかどうかは予想できない

17